



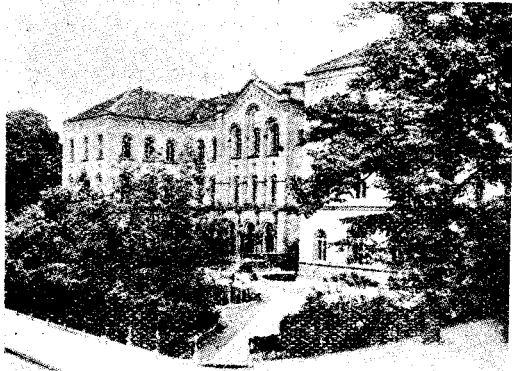
Title	統計学と私 : 留学時代とその前後
Author(s)	藤本, 幸太郎
Citation	一橋論叢, 24(1): 92-96
Issue Date	1950-07-01
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	publisher
URL	http://doi.org/10.15057/4554
Right	

學界餘滴

統計學と私

— 留學時代とその前後 —

藤本幸太郎



明治三十年から四十年代にわたる凡そ十数年間の日本の統計學界は今日の盛況に比べて比較にならない程見劣りするのには已むを得ないであらう。その頃の學者といへば花房直三郎、柳澤保惠(伯爵)、横山雅男、吳文聰、二階堂保則、水科七三郎、高橋二郎、高野岩三郎等十指を數ふるに足りない。松崎藏之助、瀧本美夫等二三の人々も統計學に關する著作があつたり、官私高等専門學校等で講義されてはゐるが、概ね專攻の士でなくその内容も今日から見れば程度の低いものであつた。唯其の間にあつて學問的氣品の高かつた著述は高野博士の論文集「統計研究」一卷(大正四年出版)であらう。これは博士が過去凡そ十ヶ年に亙る研究論文を集録したもので、長く日本の統計學界に残る文獻の一であらう。更に花房博士は約三十年に亙る内閣統計局長時代を通じて數多い論作を物されてゐる。殊に吳文聰氏は統計學の研究に熱心で主に英米書の翻譯が多かつたやうである。吳氏の著書反譯は合せて二十二三種の多數に達するであらう。

吳氏は明治二十四年から三十三年に至るまで學習院で「國勢比較統計大意」を講説されてゐたから、その教をうけて後にその専門家となつたものに伯爵柳澤保惠氏があつた。伯は後年日本の統計學界を代表して國際統計會議に列

席すること前後十一回にも及んだ。伯は又其の私財を抛ちて財團法人柳澤統計研究所を創設し、自らその總裁となつて斯學の研究を奨励されたことも周知の事實である。貴族院で有力な議員の中にも統計の價値を認めて之を爲政上に應用するに至つたのも主として吳氏の學習院における講説の刺戟に因るものといはれてゐる。

當時横山雅男さんは元氣潑潑、統計學界一方の雄でもあつた。その著「統計通論」は初版が明治三十四年七月有斐閣から出版されてから大正十年六月までに増補第四十二版を重ねてある。横山さんも亦吳氏と相似て東奔西走足跡天下に普ねく統計學の普及發達に渾身の努力を傾注されたといつて決して過言ではない。その編輯に係る「統計學雜誌」は明治十四年の創刊、爾來實に五十年に亘つて令夫人と相共に萬難を排して昭和十年四月まで繼續された。其の根氣と熱心とは人をして思はず襟を正さしめるものがある。因みに統計學社は當初政表學社と呼ばれてゐた。畢竟三田の大先達福澤先生の上梓された「萬國政表」の譯字によつたもので「スタチスチック」最古の譯字である。

二

以上は私の學生時代の前後十數年間における我が國統計學界の側面觀である。私が明治三十八年七月時の東京高等商業學校專攻部の業を卒へて九月同校講師になつてから數

學界餘滴

年後に發生した所謂辛酉事件の責を負ふて教授の職を辭し、實業界に轉じた故瀧本美夫氏の擔當であつた統計學が保險學の外に私の留學目的の一に加へられて明治四十三年十月英獨二ヶ國留學となつた。在學中高橋二郎(後弘毅)氏と新歸朝の瀧本教授から凡そ半年づつ統計學の講義を聴聞したのであるが、保險のやうに演習があつた譯でもなく唯ノートを讀んで試験に合格した迄の程度であるから、愈々將來の研究學科と決まれば責任の重大性が痛感され、渡歐眞近になつてから、内閣統計局に花房局長の意見を伺つたり、高野博士や柳澤伯を訪問して留學國や研究方法の教へを乞ふた。其の結果獨乙を留學地の一とするに至つたのである。人も知るやうに日本に於ける統計學は明治七八年頃「ミューン工科大學教授であつた。ハウスホーファーの「統計學教科書」(Dr. Max Haushofer: Lehr- und Handbuch der Statistik, 1. Aufl. 1872)が杉博士に依つて明治十六年九月から共立統計學校で講説された所謂移智變の淵源をなしており、其の後又間もなく渡來したエツチンゲン教授の「道徳統計論」など何れも和蘭に近い獨乙から紹介されてゐる因縁からいつても統計學の研究に獨乙を其の一としたのは寧ろ自然であるやうに思はれた。實際又統計學の發祥地がヘルムステット大學に始まり亞いで月沈原大學で根を下した統計學史上の事實に徴しても、是等の先輩達が私に獨乙への留學を慫慂されたのも當然であらう。

私は一九一〇年十二月二日リヨン經由伯林に着いた。其の前日が丁度獨乙の國勢調査の施行當日に該つていたのも何か統計學と因縁があるやうに思はれた。着早々伯林大學に籍をおいて冬の學期を伯林で暮すこととなつた。多年夢に見てゐた海外留學の本格的な舞臺に立つに至つた私の緊張した心境は今なほ記憶に新たなものがある。しかし冬學期の間は獨乙語の練習に主力を注いでゐたので「外國人のための獨乙」や「獨乙人の生活と施設」などというバスノースキー教授の講義などの外二三經濟學、政治學に屬する講義を聞いた。次の夏學期からポルトキヴィッツ教授の「人口理論と人口統計」やギュンター講師の「統計學の歴史と體系」パロット博士の「經濟統計」などを聴講した。その頃柳澤伯が國際統計會議に列席のため伯林に見えて私をプロシヤ統計局に案内せられたこと等も覚えてゐる。當時早稲田大學から教育學專攻の目的で伯林に居られた中島半次郎君と席を同うしてアドルフ・シュモラー老教授の「社會階級の本質と歴史」や同じ教授の「企業型態の發展」と題する名講義を聴くことの出來たのも倖であつた。有名なアドルフ・ワゲナー教授やゼーリング、ベルンハルト諸教授達の講筵に列したのも亦伯林在學中のたのしい思ひ出の一である。

伯林大學におけるポルトキヴィッツ教授の数理統計學者としての地位は獨乙のみではなく廣く各國學者の間に知ら

れてゐる。特に「小數法則」の發見は教授の名と共に永く學界に記念される法則の一であらう。パロット博士の統計學原論は私の歸朝後刊行されたものであるが、伯林大學在學中の講筵資料を潤飾されたものだけに私には一入懐しい心地がする。

三

私は一九一一年十月二日以後の冬學期を月沈原大學で過ごした、この町はその頃人口三四萬に過ぎない小都會であるが、一七三七年ゲオルグ二世の創設に成つた大學で、コンリング教授を出した大學町ヘルムステット(一八一〇年まで大學であつた)と同じく「Universitätsstadt」として著名である。學生の數も當時三三千位に上つてゐたであらう。閑靜な町でライス運河に近くプリンツ・ビスマルクが一八三二—三三年大學の學生として在學した頃の小さい建物が當時なお保存されてゐた。"First Bismarck 1832/33"なる記念の標札で示されてゐるのも床しい回顧の一である。

月沈原大學は統計學の父と呼ばれたアツ・ヘンワル教授が一七四八年國狀學の講義を開いて之に統計學なる新學名を付した程この新しい學問の育成に熱意をこめた。爾來月沈原大學の統計學講座につく學者は獨乙第一流の人たるべしとの慣例を作つたといはれてゐる。私のゐた當時の教授はウキルヘルム・レキジス先生であつた。私は日本出發の初

めからこの地を留學の場所と決めてゐたのも、一には親しく先生の教へを乞はんがためであつた。一九一一年(明治四十四年)十月から翌一二年(明治四十五年)五六月頃に至る冬の學期を北獨乙の寒風に曝されつゝも靜かな環境のうちで讀書思索することが出来た。同宿者は慶應の西本辰之助君であつた。西本君は歸朝後法學博士となり知名の學者となつてゐる。

月沈原大學に於ける冬學期にはレキジス教授の統計學の講義も演習も開かれなかつたので、主として教授の主宰される保險のゼミナールに加はつた。レキジス教授(經濟)の外に、レーマン教授(商法)、ローゼンタール(?)教授(數學)の都合三人で生命保險に力點を置いて毎週一回夕刻にかけて行はれてゐた。毎回参加の人員も相當の數に上り仲々賑かであつた。この演習は一八九五年から開かれ、初のうちレキジス(經濟)、エーレンベルヒ(法律)、ボルマン(數學)の三教授によつて行はれた慣例が、私のゐた當時にも三人の指導教授で行はれることになつてゐた。その頃大學にはレキジス教授の外に、有名なコーン教授がゐた。又勞働者保險の講義もあつてローゼンベルグ教授の擔當になつてゐた。コーン教授は國家學の演習も擔當された。當時の記録に據ればレキジス教授の分は次のやうであつた。

1. Praktische Nationalökonomie bei Prof. Letis.

學界餘滴

2. Übungen im Seminar für Versicherungswissenschaften bei demselben.

月沈原大學の冬學期を了へてから後の在獨凡そ半ヶ年を豫定通りミュンヘン大學のマイヤー教授に指導を受ける目的で、四月忽々南獨バイエルンの首都ミュンヘン(民顯)に轉じた。財部靜治(京大)、石原純(東北大)の兩君はその頃私の交つた友人であつた。人も知るやうにマイヤー(Prof. G. v. Mayr)教授は所謂社會統計學派の碩學でその門下から輩出した學者が多數に上つた。現にツァーン教授なども其の有力な一人である。私の在獨中、教授は老齡ではあつたがなほ鑿鑿たる元氣で、大學では財政學、統計學、經濟學などを擔當されてゐた。保險學の演習も統計學と併せて教授の指導する所で之に参加してゐる學生も相當多かつた。教授はこの夏學期中理論統計學の外に人口統計學も講筈目次の中にあつたから私にとつては好都合であつた。記録によればマイヤー教授に屬するものは次の如くである。

1. Prof. G. v. Mayr: Statistik(Theoretische Statistik und Bevölkerungsstatistik)
 2. Prof. G. v. Mayr: Seminar für Statistik und Versicherungswissenschaft.
 3. Prof. G. v. Mayr: Finanzwissenschaft.
- 尤もその講義の内容は教授の大著 Statistik und Gesetze

一橋論叢 第二十四卷 第一號

Verhandlungen 第一卷(討論)と第二卷(人口統計)に盡きてゐる。教授の講義には財部君と同席で聽いてゐたなども忘れえぬ追憶の一つである。マイヤー教授のステルンベルガー湖畔の居宅へは二三回招待された。白雪を載いた遠いアルプス連峰を湖面に倒影せる絶景は靜寂な環境と共に今もなほ私の脳裡を去來する。

四

かうして豫定の在獨二ケ年の日子もやがて盡きんとする一九二二年十一月の中旬には最早和蘭を経て倫敦に渡つてゐた。十一月十九日ロンドン大學の一分科 London School of Economics に入學した。二十一日夕刻六―七時の間に第一回目のボロー教授(A. L. Bowley)の統計學を聽いた。グラントやベチーの所謂政黨學以來の傳統によつて英國の統計學は自ら國勢學派の流をくんだ獨乙大學統計學とは著しくその趣を異にしてゐる事實も身を以て體驗することができた。教授の名著 Elements of Statistics や大學に於ける教科書 Elementary Manual of Statistics を繙くものは今日と雖もマイヤー、チスカ、コンラッドなど獨乙人の著書と比べて著しく相異なるもののあるのに氣付くであらう。當時英國ではボロー教授の外に知名の學

者としてはユールやエッヂウォースのやうな大家があつた。後者には一九二五年の刊行になる Papers relating to Political Economy, 3 voe. がある。現代の經濟學が概ね數理統計的な傾向を帯ぶるに至つたのは英國にとつては寧ろ自然の勢かも知れない。而も斯る傾向は今日では單り英國許りでなく獨逸諸大學に於ける統計學の研究すら往年の國狀論に較ぶれば、全く變質して了つたと評しても過言ではあるまい。私の在英中の英國統計學界の趨勢も亦今日と略ば類似してゐたことを回顧される。

願みて當年の日本における統計學界の實狀に徴するに、その科學的水準は素より是等先進諸國の進歩に比べて遙かに後塵を拜するの感があつた。しかし、それにしてもなほ維新この方杉、吳、花房、横山、高橋、水科、柳澤、高野、財部、二階堂其の他多くの學者が世間の白眼を物ともせず孜孜として不斷の研究を續けつゝ中には官途につきも立身の餘地なく、學界にあつても學位をかり得ず、究乏の裡に安んじつゝ終生斯學の普及發達に全心全靈を抛つた人々のあるあつて終に今日の盛況を見るに至つたものである。今の統計學に従事する學徒は此の點に深く思をいたし更に一段の精進を續けて再建日本の學界に貢獻する所がなければならぬと思ふ(二五・四・二四日稿了)。